



ツイッターで連載している小説です。まとめ読みできるように電子書籍にしました。現在引き続き連載中です。



【連載1】 6月、梅雨という言葉がなにか美しくてみずみずしい、憧れをかきたてるような響きをもってゆらめいていたはずなのに、いざ始まってみれば、圧倒的に重たい大気の下でぐったりするのみだった。

【連載2】 まだ梅雨に入ったばかりのその週、わたしはもう梅雨にうんざりしていた。金曜日の夕方の成田エクスプレスはガラガラで、わたしは4人掛けの、黒い重厚なシートに埋もれて車窓にかかる水滴をみるともなしに眺めていた。

【連載3】 そのとき、通路のわたしの脇を通り過ぎようとした、いかにも金持ちふうの男性がわたしのほうを一瞥したときの視線に（しかも直接目があったわけではなくて、そういう視線を感じたにすぎない。自意識過剰だと自分でも笑ってしまう）、

【連載4】 わたしは一所懸命いろんな言い訳を捜していた。もう40歳は過ぎていると思われる女、結婚指輪をしていて、着ているものも持ち物も、それなりの財力を（しかもそれは夫のステイタスや経済力をも象徴する）感じさせるもので、だからお金をかけたぶん年齢よりは幾分若く、

【連載5】 所帯じみた疲れも感じない。しかし、そういう既婚女性ならば小学生くらいの子どもをひとりかふたり連れていてもいいのに、彼女はたったひとりで、夫も近くにはいないようだし、友達連れでもない・・・という一瞬で判断を下された（と一瞬で思いこんだ）その視線に、



【連載6】「わたしは確かに経済力のある夫の妻で、小学生の子どもがふたりいる既婚女性だわ。でも今日夫も子どもも、誰も一緒じゃないのは、わたしが仕事を持っており、これからこの特急列車で成田に向かい飛び立つ先には、仕事のために渡航するからなのよ」。

【連載7】もしそんな主張をわたしが声高にしたとして、一体なにが解決して、誰の気が済むというのか。もしわたしが夫と子どもと一緒にいたら、今度は、「わたしはファミリーで賑やかに旅行に出かけようとする幸せそうな恵まれた既婚女性に見えるだろうけれど・・・」

【連載8】と、別の反撃を開始するというのか。その場合の反撃は、今度はどんな主張になりうるというのだろうか。いちいち「本当のわたしはこんなじゃない」という主張をまわりつかせたまわわたしはどのくらい生きてだろう。

【連載9】脇をすりぬけた男性がいつてしまう背中をわたしはずっと見つめている。仕立ての良さそうな、カジュアルな揃いのスーツ姿は、勤め人としても、自由業としても、経営者としても通用しそうで、他人への印象を計算することに著しく長けているのではないかとわたしは考えた。

【連載10】仕事？どんなお仕事をされているんですか？とさっきの男性に質問されることを想像する。翻訳を少々、時々雑誌などにエッセイを書いているんです。どんな雑誌です？ええ、あの・・・わたしたちくらいの世代の女性がよく読むような・・・まあ女性向けの雑誌ですね。



【連載11】 わたしは赤面する。実態のないような肩書きもないような自分の立場が、ときどき猛烈に恥ずかしくなる。その仕事の原稿料だけで今の暮らしをひとりで維持できるわけなどないのに、仕事を持つ女性ヅラしてしまう自分をずっと恥じてきた。

【連載12】 小さいアパートで貧乏暮らしでもライターという仕事で自立しているという、若い女性を前にするといつも萎縮した。あんたなんてダンナのお金で優雅な生活して、趣味と称して主婦の退廃について日記みたいな稚拙な文章書いてお小遣い稼ぎしてるんでしょ。

【連載13】 誰かに実際そんなことを言われたこともないのに、まさに被害妄想の作り出したそういう台詞をひとりで反芻してはいじけているのだ。さて、巷で流行しているtwitterというものに、ぼちぼちとではあるけれど書き込みを続けていたら、

【連載14】 「海外旅行をして現地からリアルタイムでツイートするという仕事」 が舞い込んだ。ウェブ上の女性誌と旅行会社が組んでそういう企画を開始したのだという。いずれは読者にモニターとして参加してもらう予定だが、当面は文筆家に頼んで、道筋をつけてもらいたい。

【連載15】 そもそも知り合いのツテでしか仕事はないわたしに、どうしてそのような仕事の依頼がきたのか不審に思ったが、外国語に堪能で旅行慣れしていて、文章も書けて、そこそこ暇である・・・さらに渡航費や宿泊費は出るものの、滞在費用はこっちもちなので、





【連載16】そこそこ金銭的に余裕があったほうがいい・・・と言う条件を、わたしはおめでたくもクリアしているのだった。それで自嘲気味に、引き受けてもよいのかな、と考えた。かくしてわたしはわたしのアカウントsummeryerから、ハワイ旅行の全てを呟くことになった。

【連載17】通信費用は向こう持ちで、ホテルからパソコンを使う以外にも、携帯電話から接続して、気軽にツイートをたくさんしてくれと言われていた。ウェブマガジンでその企画が紹介されたとたん、トラベラーであるわたしには一挙に1000人単位のフォロワーがついた。

【連載18】フォロワーをひとりひとりクリックして見れば（わたしはそういうことをするくらいに暇を持てあまして人間だ。普通のフォロワーの多い有名な人はきっと増殖していくフォロワーをひとりひとりフォローすることはおろか、プロフィールを読んだりする暇もないのだろう）

【連載19】20代から30代の、海外旅行経験も豊富そうなイマドキの働く女性が多いですね、と、そのウェブマガジンの編集者がわたしに読者層を伝えたとおりの、フォロワーの内訳だと思えた。そしてひとりひとりのフォロワーを全員フォローした。

【連載20】所謂フォロー返しという親切心ではない。わたしの呟きを読む読者層の、リアルな声を聞いて、こちらが予習しておこうと思ったのだ。旅に出る前に。だからわたしは1000人の女子と電子空間をわかちあっている。



【連載21】最初は1000人以上のフォロワーの目がひたすら恐ろしかった。しかしすぐに慣れて、気づいた。わたしと、（任意の）彼女は対等である。わたしが一方的に「見られる」側ではない。わたしも（任意の）彼女を見るし、彼女はこちらを見ていないかもしれない。

【連載22】さて、成田エクスプレスは、静かに雨の中を進んだ。成田エクスプレスに乗った瞬間、風景のなかの日本語で書かれた派手な色の看板はフィクションのように感じられはじめていた。アジアのどこかの都市で、漢字で書かれているので読めそうなのに、読めないみたいな。

【連載23】車内は空調が効いて、先ほどまでの蒸し暑さも、やはりフィクションのように感じられる。わたしは車内販売で熱い珈琲を買う。紙カップに触れる指に伝わる熱は、わたしをひんやりさせる。わたしはこのようにしてとめどなく呟いている。仕事だから？

【連載24】珈琲を飲みながら、次にどのようなツイートをしようか思案していたが、ふと思いついて、twitterの検索機能を使ってみた。今、この時間帯にまさに成田エクスプレスに乗っているとか、成田空港にいる人がツイートしていたら面白いなと思ったのだ。

【連載25】検索結果のツイートがずらっと並んでいる中のアイコンの写真に、ふと気になるものがあった。男性の顔写真だった。見覚えがある。つい、さきほど、見た。ツイートの内容からして、今、まさに成田エクスプレスの車内にいるらしい。あの、男だ。

【連載26】さきほど、男の顔を直視したわけでもないのに、それがあの男だと断言できた。写真の中に作られた男性の雰囲気は、先ほど見た彼の印象をそのまま具現していた。背景が黒で、そこにモノクロの顔写真。笑っても怒ってもなく、しかし無表情というのでもない。

【連載27】今、まさにこの時間に、成田エクスプレスに乗っているとわたしが書いたので、これを読んでいる方で同じような検索をすれば、その男が誰かばれてしまうだろう。1000人の女性の前に彼をさらすのは趣味じゃない。だから少しだけ脚色を入れて描写した。

【連載28】 やがて成田空港第1ターミナルに到着する。夜の飛行場。これからわたしは夜間飛行に出発する。荷物を転がしながら、コンコースを進んでゆく。もうずいぶん人は少ない。この巨大なターミナルの中に、twitterで呟いている人間が、ここにも、あそこにも。

【連載29】 航空会社のカウンターにあの男がいた。ファーストクラスの窓口にいる。男はいかにも慣れた様子で手続きをしている。わたしは隣のビジネスクラスの窓口に向かうのをためらっている。なんとなくうしろめたくて近くに寄れないのだ。男をフォローしてもいい。

【連載30】 出国手続きを済ませ、航空会社のラウンジにはいかないで、コンコースのベンチで搭乗までの時間を過ごす。この場所で旅人を眺めるのが好きなのだ。飛行機に乗るというのに（しかもたいていの国際線は長時間だ）完璧なメイクを施した女性や、



(つづく)